

# JAIR Newsletter

No.165 October 2020

日本国際政治学会

  
<http://jair.or.jp/>

## [目次]

巻頭言.....1	2020 年度学会奨励賞について..... 6
韓国国際政治学会 (KAIS) 会長ご挨拶.....2	2021 年度研究大会報告募集のお知らせ..... 7
事務局からのお知らせ.....3	理事会便り..... 8
2020~22 年期組織図・構成.....4	編集後記..... 9
会計部からのお知らせ.....5	

## 〈ひと〉と文化の視点からみた国際関係、この 30 年

川村陶子

2020 年はコロナ禍の年として歴史に残るだろうが、ドイツ再統一から 30 周年でもある。1989 年にベルリンの壁が崩壊し、その後一年足らずの間に東西ドイツが再統一したことは、より人間らしい暮らし—日本国憲法第 25 条の表現を借りるなら、より「文化的な生活」—を求める〈ひと〉の意志と行動が、〈くに〉の私たちを変え、国際秩序を変革させる証左となった。当時、若かった筆者は、そうした〈ひと〉の力をより良く活かすメカニズムを、国境を越えて〈ひと〉をつなぐ文化の視点から研究したいと考えていた。

その後の国際関係の現実が示したのは、文化が世界の分裂や社会内の対立を特徴づけ、こじらせる枠になることだった。ユーゴやルワンダの内戦、「9・11」とそれに続くテロの数々、IS の台頭、各地で躍進する排外主義と権威主義。格差が広がり、将来が不透明な中、不満と不安の矛先が異なる文化的背景をもつ「他者」に向けられていく。移民を受け入れ多様性をパワーの源としてきた国々において、マジョリティとマイノリティの間で偏見と憎悪のスパイラルが進み、〈くに〉の安定をゆるがす現象がみられる。2015 年をピークとする難民危機は、文化的な距離が遠い所への〈ひと〉の大規模移動が、移動先の地域に暮らす〈ひと〉に負担と不安を強いることを明らかにした。

再統一を達成したドイツを待ち受けていたのは、東西の体制下で社会化した異なる文化集団を統合するプロジェクトだった。多数派ドイツ人と、旧東西ドイツ時代以来社会に根づいてきた外国にルーツをもつ人たちが、同じ〈くに〉の構成員として向き合う必要にも迫られた。そこに、ヨーロッパの外から大勢の人びとが、より「文化的な生活」を求めてやってきた。ナチ時代への反省から「多様なもの」の容認を国是としてきたドイツは、メルケル首相のひと声で多数の難民を受け入れたが、国民の間には文化多様性への疲れが広がっている。2017 年の連邦議会選挙で右翼政党「ドイツのための選択枝」が第 3 党になったことはそのあらわれである。

こうした状況の中、〈ひと〉のレベルからの共生と繁栄を実現する鍵は、文化多様性の多次元性を意識することにあるだろう。メルケル首相は、30 年目の統一の日を前にしたインタビューで、「東」や「西」などの一元的集団に還元されない「個人を核とした多様性」を国の強さの基盤とすべきだと語った。

この 30 年、世界においては、理論面ではソフト・パワー論、現象面では韓流の広がりや若い世代を支え手とする社会運動といった、〈くに〉を越えて〈ひと〉をつなぐ文化に目を向ける機会も存在している。ドイツでも移民統合の現場を中心に、インターカルチュラルリティを資源として活かすことが「より人間らしい社会」につながるとする議論が力を得ている。次の 30 年も、文化のさまざまな機能を見据え、悲観的になりすぎることなく、〈ひと〉の視点から国際関係の構築運営を追究したい。



---

## 韓国国際政治学会（KAIS）会長ご挨拶

---

本学会と韓国国際政治学会（KAIS）とが協力し、日韓合同部会を開催し始めて20数年が経過しましたが、今年度はオンライン開催となったために、KAISのイ・サンファン会長をはじめ報告者をお招きできず、大変残念でした。例年、研究大会の懇親会の際にKAIS会長にスピーチをお願いし、また訪日された方々と交流の場をもっていますが、その機会も逸してしまいました。この度、本学会の研究大会に際して、イ会長より挨拶文を頂戴したので、ここに掲載いたします。会員の皆様にご覧いただければ幸いです。

2020-2022 期理事長 大矢根 聡

### KAIS President's Greetings

Hello, distinguished members of the Japan Association of International Relations,

This year is the 30<sup>th</sup> anniversary of post-cold war period and the unification of Germany. Moreover, the year 2020 is the 70<sup>th</sup> anniversary of the outbreak of the Korean War. The Korean peninsula looks like a cold-war island of post-cold war period since it started in 1990. Korea has been still divided into the North and the South even if Germany has been unified in 1990 just after the fall of the Berlin Wall in 1989. Inter-Korean relations come to a deadlock despite recent three-year expectations. Koreans are living in an era of uncertainty with worrying about nuclear confrontation. Also, the US-South Korea alliance and the tripod cooperation among ROK, the US and Japan are undergoing a transition in face of the rising-up China.

Today, the COVID-19 pandemic is changing the way of life both in domestic and global communities. Post COVID-19 era is being characterized as deglobalization and digitalization. Deglobalization has originated from the COVID-19 pandemic and its consequent problems – including restriction on travel and transfer of goods. Digitalization continues to accelerate because of the pandemic and the ICT revolution. Furthermore, the COVID-19 recession is a major ongoing global economic crisis. The crisis, the worst global economic situation since the Great Depression in the 1930s, began due to the economic consequences of the COVID-19 pandemic which is still in progress as we speak. This recession has been unusually severe, and is causing rapid increases in unemployment in many countries. And, as COVID-19 continues to spread, some countries, including South Korea, are putting their citizens on various forms of lockdown. Now we recognize that COVID-19 is a new disease that requires a collaborative response, including sharing of information and solutions between nations. We need to share our respective experiences in addressing the pandemic in an open, transparent, and democratic manner.

Recently, the U.S. has shifted from viewing China as a strategic partner to a strategic competitor. The Trump administration has challenged China in three key areas: strategic control over the Indo-Pacific Ocean, trade, and ICT dominance and technical standards. Many states are attempting to exploit the growing US-China competition for their own benefits and avoid being penalized by it. Nevertheless, they are in a dilemma to take a side between the US and China. The Neo-Cold War is a product of the US-China hegemonic struggles in post-cold war period since China has implemented a rapid growth in economic and military powers. It can be described as their value clashes. A current global order has been reshuffled into two competing groups including ‘a shared values first’ network and ‘a shared interests first’ network. Now South Korea is having a hard time in a dilemma to take a side between the US and China. I believe our strategic choice should be based more on shared values than on shared interests.

On the other hand, in Japan Mr. Suga Yoshihide became Japan's prime minister, but no major changes are expected in its

soured relations with South Korea in near future. The two neighboring countries' efforts to tackle mutual challenges, including the COVID-19 response, the nuclear threat from North Korea and US-China rivalry, are seen as unlikely to revitalize Seoul-Tokyo relations. It will be hard to see a drastic change in Japan's position toward South Korea, as prime minister Suga vowed to continue with former prime minister Abe's policies. Nevertheless, I believe Japan-South Korean relations can be rebuilt as vital partners of the shared values first network all in good time.

Most importantly, I would like to contribute to the improvement of Japan-South Korean relations through the JAIR-KAIS academic exchanges. It accomplishes public diplomacy working with both governments through our bilateral networks.

Distinguished JAIR members,

My executives and I would like to make all our efforts for the JAIR-KAIS partnership dedicating to both societies. I sincerely wish you happiness and success. I hope everything goes well with you all year.

Thank you very much.

Lee Sang-hwan

President, The Korean Association of International Studies

---

## 事務局からのお知らせ

---

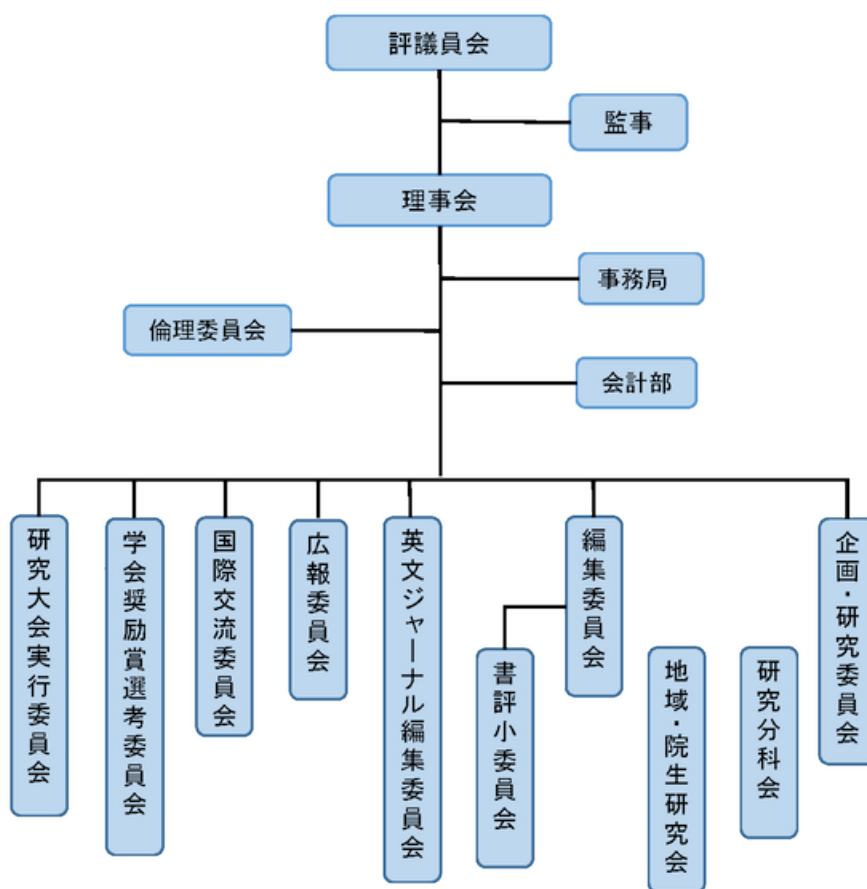
1. 研究大会の開催  
研究大会が10月23～25日にオンライン会議として開催され、延べ人数で2385名（同一端末で5分以上滞在した人数）の参加があり、盛会のうちに終えることができました。会員の皆様に感謝いたします。研究大会の詳細は、次号で研究大会実行委員会から報告されます。
2. 理事および各委員会の委員の決定  
6月20日に今期の理事が決定し、また9月13日の理事会において、各委員会の委員が決定しました。なお今期は、計71名の理事・委員のうち、34名が女性、37名が男性となっており、ジェンダー比率も均衡化しています。詳細は組織図・組織構成をご覧ください。
3. 新入会員の承認  
第2回理事会（6月20日）、第3回理事会（9月13日）、第4回理事会（10月23日開催）で入会申込書等が回覧され、計47名の新入会員が承認されました。会費の納入をもって正式に会員となりますので、入会を承認された方々は会費を納入してくださいませよう、お願いいたします。
4. 今後の研究大会予定  
2022年度の研究大会は、仙台市の仙台国際センター（実行委員長は本多美樹会員）で開催する予定です。なお、2021年度の研究大会（実行委員長は小尾美千代会員）は、名古屋市の名古屋国際会議場で10月29～31日に開催する予定ですが、新型コロナウイルス感染症の流行状況などによっては変更する可能性があります。変更の際は学会ウェブサイト、会員向けメーリングリストでご案内します。
5. 会計部スタッフのご退職  
23年10カ月にわたり会計部スタッフをお務めいただいた中里淳子さんが、10月末で退職することが10月23日の理事会で承認されました。学会に対して顕著な貢献をされ、その貢献なくしては会計業務等の円滑な遂行は実現しなかったに違いありません。心より感謝いたします。

6. 会員登録情報更新のお願い

所属機関や学会誌送付先住所に変更があった場合には、会員登録情報の更新をお願いいたします。特に、学会活動活性化のため、メールアドレスの登録・更新にご協力ください。学会ウェブサイトの「会員データ変更」から「オンライン会員情報管理システム（e-naf）」に入り、修正・追加もしくは変更の申請を行っていただけます（<https://www.e-naf.jp/JAIR/member/login.php>）。

2020-2022年期理事長 大矢根聡  
2020-2022年期事務局主任 武田知己

一般財団法人日本国際政治学会 2020～22 年期組織図・構成 [2020 年 10 月 23 日現在]



一般財団法人日本国際政治学会 組織構成

評議員	赤木完爾、石田淳、遠藤誠治、大芝亮、太田宏、吉川元、國分良成、古城佳子、酒井啓子、佐々木卓也、田所昌幸、中西寛
監事	篠原初枝、山田敦
理事会	大矢根聡（理事長）、飯田敬輔（副理事長）、武田知己（常任理事）、青山瑠妙、磯崎典世、遠藤貢、楠綾子、葛谷彩、倉科一希、鈴木基史、都留康子、潘亮、宮城大蔵、和田洋典

事務局	武田知己（主）、 佐渡紀子（副：学会会費再検討担当）、杉之原真子（副：学会誌再検討担当） 久保田摂子（アシスタント）
会計部	磯崎典世（主）、都留康子（副） 渡邊祐美子（アシスタント）
倫理委員会	飯田敬輔（主）、井上あえか、大島美穂、都丸潤子、向和歌奈
企画・研究委員会	宮城大蔵（主）、和田洋典（副）、大林一広、勝間田弘、杉山知子、玉置敦彦、 鳥潟優子、林載桓、和田賢治、研究分科会ブロックA幹事、B幹事、C幹事、D幹事
研究分科会	（研究分科会代表幹事、各ブロック幹事、研究分科会責任者連絡会議については、次号に掲載 します）
地域・ 院生研究会	湯浅拓也（コーカス）、深澤一弘（関東）、浅野塁（関東副）、赤星聖（関西）、 濱砂孝弘（九州）、オクタイ・クルトゥルシュ（海外）
編集委員会  書評小委員会	遠藤貢（主）、潘亮（副）、葛谷彩（副）、西山隆行（副） 『国際政治』各号編集担当者 分科会ブロックA幹事、B幹事、C幹事、D幹事 西山隆行（主任）、油本真理、市原麻衣子、井上実佳、上英明、白鳥潤一郎、外山文子、 浪岡新太郎、西田竜也、濱中新吾、堀井里子
英文ジャーナル 編集委員会	鈴木基史（主）、伊藤融、小濱祥子、鈴木一敏、籠谷公司、中戸祐夫、廣野美和 事務スタッフ：氏家佐江子、桑原洋子
広報委員会	楠綾子（主）、倉科一希（副） 小林哲（アシスタント）
国際交流委員会	青山瑠妙（主）、金ゼンマ（副）、上久保誠人、東野篤子、三牧聖子
学会奨励賞 選考委員会	河野康子（主）、浅野豊美、青野利彦、伊藤剛、亀山康子、栗栖薫子、清水奈名子
研究大会 実行委員長	2020年度 湯川拓（つくば大会） 2021年度 小尾美千代（名古屋大会） 2022年度 本多美樹（仙台大会）

---

## 会計部からのお知らせ

---

### 1. 会費納入のお願い

本年4月に会費の請求書兼振替用紙をお送りしましたが、今年度は会費納入率が例年より低くなっております。未納の会員には、11月20日ごろに請求書兼振替用紙を再送させていただきますので、納入いただけますようお願い申し上げます。

なお、会費支払い状況については、下記ウェブサイトのオンライン・システムでもご確認いただけます。  
オンライン会員情報管理システム（e-naf）

<https://www.e-naf.jp/JAIR/member/login.php>（会員番号、パスワードが必要です）

会計部主任 磯崎典世

## 2020 年度学会奨励賞について

2020 年度の学会奨励賞は、早丸一真会員の「一八六〇年代初頭における天朝の定制と外政機構の変動—中国近代外交形成論批判」『国際政治』第 197 号（2019 年 9 月）に決まりました。以下、首藤もと子・学会奨励賞選考委員会主任からの講評と早丸会員の「受賞のことば」を掲載します。

### 学会奨励賞選考委員会主任講評

早丸論文は、19 世紀の清国史料である《籌辦夷務始末》を丹念に読み込み、清国の「外交」に関する豊富な先行研究の論点を批判的に検証して、「天朝の定制」が当時の文脈で想定していた秩序観を独自の観点から論じています。すなわち、本論文は、清朝末期の官僚が外国の要求を拒否する際の常套句として用いた「天朝の定制」について、それが西洋諸国からの「対等交渉権」を否定する方便であり、前近代的対象であったとする近代外交史観から論じられてきたことを指摘し、そうした近代外交史観が捨象してきた当時の文脈と視点から、清国の外政機構の制度と機能を史料で裏付けつつ論じています。そして、清国は「外交」をしていたという前提に立つのではなく、内乱と外敵を区分せずに対応することによって「天朝の定制」を再建しようとしたことを、当時の官僚の認識と行動に言及しつつ検証しています。

本論文のテーマについては、世界的にみても、坂野正高氏の研究をはじめ日本での研究の蓄積が多いのですが、本論文は 1861 年に設立された総理衙門の権限やその通商大臣との業務関係について、坂野氏の研究に修正を迫る指摘をしています。また、「天朝の定制」に関する比較的最近の研究でも「通商が夷務の外延であった」と指摘されていますが、本論文では、曾国藩が通商は内地の塩務と同様に国内統治の問題と認識していたことに言及して、清国の官僚が当時、外国との通商に限定することで「天朝の定制」を保持しようとした夷務の実態を、詳細な分析を重ねつつ検証しています。

このように、本論文はその方法論と検証の内容において、独自性を高く評価できます。まず、本論文の方法論は、西洋の分析基準の援用ではなく、当時の時代と地域の文脈から再構成しようとする点で画期的な新しさがあります。現代的視点では陥りやすい史料解釈の誤解を批判して、同時代的に再構成しようとする本論文の姿勢は注目に値します。また、内容において、これまでの研究が、清国と国際社会との関与を、清国の「外交」ととらえ、主権国家を前提とする近代外交史観で論じていたことに対し、本論文は清朝の官僚が記録した当事者の認識と意図を解釈することにより、「天朝の定制」の秩序観を再構成しています。本論文は、そうした史料の地道な分析により、清国の体制や「外交」に関して、理路整然と説得力のある主張を展開しており、西洋近代史観に基づいてきた国際関係史研究に一石を投じる研究として、日本国際政治学会の優秀論文に値する論文であると評価します。

最後に、今回の選考では、昨年度と同様に、多様な研究テーマに関して多くの力作がありました。惜しくも受賞を逃した会員の皆さんも、自信をもって研究を発展させて、今後学会等で大いに活躍下さい。

学会奨励賞選考委員会主任 首藤もと子

### 受賞のことば

私はもともと岡山大学の東洋史研究室で中国近代史を勉強しておりましたので、東京大学総合文化研究科の国際関係論の修士課程に入った時に、少なからず戸惑いを感じるようになりました。その折に、往年の『国際政治』に掲載されていた 19 世紀後半の国際関係史に関する数々の論文から勉強させていただく中で、自分自身の研究課題を模索し、いつかこのような研究史の蓄積の中に自らの研究を位置づけることができると心に期するところがあつたわけがございます。そうした研究に目をとめていただきました奨励賞選考委員会の先生方に厚く御礼申し上げます。

昨年掲載いただいた論文は、「国際政治と中国」という 197 号の特集のテーマを目にした時に、国際政治と中国を結びつけて問題をとらえようとする見えにくくなるものがあるという話を日頃調べている 19 世紀後半の史料に基づいて考えてみたいと思い、取り組んだものです。この特集号の編集責任者を務められた川島先生に、改めてお礼申し上げます。今回の論文には、いささか大げさなサブタイトルが付けられておりますが、これは懇切丁寧な査読意見の中でご提案いただいたものを拝借させていただいたものですので、査読いただいた先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。



本日は、このような表彰式の間を設けていただきまして、事務局の皆様を始め、お世話になった全ての方々にお礼申し上げます。最後になりましたが、私に国際関係論に入門するきっかけを与えてくださった石井明先生、19世紀の中国の対外秩序に関する研究の第一人者であり、いつも励ましていただいている茂木敏夫先生、そして、なかなか論文を書かない学生を信じて見守ってくださった指導教員の川島真先生に深くお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

早丸一真

---

## 2021年度研究大会 部会企画・自由論題報告募集のお知らせ

---

2021年度研究大会（名古屋国際会議場（名古屋市）、2021年10月29日～31日）での部会企画の提案および自由論題（部会）の報告希望を募集致します。応募に必要な事項は以下の通りです。応募に際して、報告者についての下記の内規を確認していただくようお願い致します。なお部会（自由論題部会を含む）での報告者には、ペーパーの提出が義務づけられています。

### （1）締め切り：2020年12月18日（金）（必着）

送付方法：応募はe-mailまたは郵送にてお願いいたします。

送付先：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学総合グローバル学部 宮城大蔵

e-mail：tmiyagi☆sophia.ac.jp（☆を@に置き換えてください）

電話：03-3238-3537

メールの件名または封筒に「日本国際政治学会2021年度研究大会部会企画・報告応募」と明記してください（郵送の場合、学内の配達に時間を要するため、都内からでも投函翌日には届かないことが多いので、余裕を持って発送してください）。

### （2）応募に必要な事項

#### ①部会企画案

(i) テーマ、(ii) 趣旨（800字～1200字程度）、(iii) 報告者、司会者、討論者などを記すこと。

#### ②自由論題報告案

(i) テーマ、(ii) 要旨（800字～1200字程度）などを記すこと。

部会企画の提案者もしくは自由論題の報告希望者のいずれも、氏名、所属、職名、連絡先（住所、電話番号、e-mailアドレス）を記すこと。

応募用紙は、学会ウェブサイト (<https://jair.or.jp/committee/kikaku/5970.html>) からダウンロードできます。

### （3）部会参加に関して、以下の事項が内規に定められていますので、ご注意ください。

1. 部会参加者は、原則として、会員及び入会申請中の者とする。
2. 一般会員が、部会及び自由論題部会において報告を行う場合、応募時において過去二年間（2020年度、2019年度）に開催された研究大会の部会で報告を行った会員（申請中を含む）は、報告者の候補たりえない。この原則は司会者及び討論者については適用されないものとするが、なるべく同じ会員の登壇は控えることとする。
3. 学生会員が、部会及び自由論題部会において報告を行う場合、応募時において過去一年間（2020年度）に開催された研究大会の部会で報告を行う会員（申請中を含む）は、報告者の候補たりえない。この原則は司会者及び討論者については適用されないものとするが、なるべく同じ会員の登壇は控えることとする。
4. 自由論題部会にて報告を行う場合、上記の2. 及び3. に加え、応募時において過去二年間（2020年度、2019年度）に開催された研究大会の分科会で報告を行っていない会員（申請中を含む）、学生会員の場合は過去一年（2020年度）の大会で報告していない会員が優先される。

企画・研究委員会主任 宮城大蔵

---

## 理事会便り

---

### 編集委員会からのお知らせ

『国際政治』特集号（211号）の投稿募集を開始します。  
詳細は下記 URL をご覧ください。

『国際政治』211号「岐路に立つアフリカ」（仮題） 杉木明子会員編集担当  
申込締切：2021年3月31日

投稿募集要項はこちらから。

<https://jair.or.jp/committee/henshu/5961.html>

原稿を提出する際の執筆要領はこちら。

<https://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/documents/shippitsuyoryo.pdf>

なお、独立論文の投稿は随時受け付けています。投稿の申込先などは『国際政治』各号の末尾に記載されているのでご覧ください。

特集号、独立論文ともに、会員の皆様の投稿をお待ちしています。

編集委員会主任 遠藤貢  
副主任 葛谷彩・潘亮  
jair-edit☆jair.or.jp  
(☆を@に変えてください)

---

### 国際交流委員会からのお知らせ

#### 2020年度国際学術交流助成（第2回募集）

2020年度国際学術交流助成（第2回募集）への申請を公募しております。

申請資格・助成対象・申請方法の詳細については、以下のページをご参照ください。

<https://jair.or.jp/committee/kokusaikoryu/5780.html>

なお、申請上の注意・申請用紙は以下のページよりご利用可能です。

[https://jair.or.jp/membership/application/academic\\_exchange.html](https://jair.or.jp/membership/application/academic_exchange.html)

募集の締切は11月26日（木）で一橋事務所必着となっております。

国際交流委員会主任 青山瑠妙

---

### 広報委員会からのお知らせ

学会ウェブサイトでは、会員の皆様からのシンポジウム等のお知らせや新刊紹介などを随時掲載しております。情報交換・共有の場としてご活用ください。掲載を希望される場合は、ウェブサイトの「お知らせ投稿フォーム」(<https://jair.or.jp/membership/information/form.html>)をご利用のうえ、ご投稿ください。統一的な記録を残していく必要がありますので、お手数ですが、上記のフォームへの記載をお願いいたします。パスワードは、「オンライン会員情報管理システム（e-naf）」内に掲載されております。e-nafにログインいただきご確認ください。

その他、ニューズレターやウェブサイトに関してお問い合わせ等がありましたら、広報委員会（jair-pr☆jair.or.jp）にご連絡ください。（☆を@に代えてください）

広報委員会主任 楠綾子



## ■編集後記

今月号よりニューズレターを担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

「新しい日常」ということばに抵抗を覚えつつ、感染症が確実に人の行動も思考も変えることを実感しています。(AK)

新たにニューズレター編集の担当となりました。よろしくお願いいたします。

アメリカ大統領選挙、今度は何が起こっても驚かず、見守りたいと思います。(IK)

前期より引き続きよろしくお願いいたします。サーバー移転後のウェブページの充実やニューズレターの配信による会員間の情報共有などに、微力ながら貢献できるよう努めて参ります。(SK)

日本国際政治学会ニューズレター No.165  
(2020年11月2日発行)

発行人 大矢根 聡

編集人 楠 綾子・倉科 一希・小林 哲

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学第三研究館内

日本国際政治学会 一橋事務所気付

楠 綾子 [jair-pr☆jair.or.jp](mailto:jair-pr@jair.or.jp)